

豆と俳句 ② 豆の花と俳句

塩田 芳之

豆の花は一般に満開の桜や大輪の菊のような豪華さは感じられないが、小さな花が咲乱れたさまは賑やかななかに鄙びた楚々とした美しさがある。現在は環境が変化し住宅事情もあり、多くの人々は昔の人が受けたような感情に浸ることは難しい。

豆の花 (晩春)

豆は晩春から夏に花が咲くものが多いが中でも蚕豆の花、豌豆の花が代表的で、俳句では豆の花といえば蚕豆、豌豆の花をさすことになっている。豆類の花は蝶が羽を広げて舞う姿を思わせる蝶形花で、豆によって形、色などに特徴があり美しくやさしい(小豆、隠元豆、刀豆などの花は夏の季題。以下説明はいずれも歳時記より引用、歳時記によって微妙に表現に違いがある)。

落柿舎に長逗留や豆の花 格堂
豆咲くや汚き蔵に日の当たる 喜舟
豆咲くや小さき城持つ片田舎 迷堂
豆の花咲くや小川の水の勢(せい) 正岡子規

しおた よしゆき 福山市立女子短期大学
名誉教授

草化して胡蝶になるか豆の花 :
公事に勝ちて里に帰れば豆の花 :
蚕豆も豌豆も咲くや庭畑 :
葉を摘む手又来て豆の花盛り 高浜虚子
乾しものは紺の法衣や豆の花 :
涙ためて背戸に立つ子や豆の花 西山泊雲
葉のおごりにすねて小さし豆の花 :
豆咲くや南都第一東大寺 松根東洋城
ひとり生えて咲いてゐる豆の花
種田山頭火
土落として又履く草履豆の花
長谷川かな女
豆の花海にいろなき日なりけり
久保田万太郎
屋根石に炊煙洩るゝ豆の花 杉田久女
人通りなかなか多く豆の花 高野素十
日静かに野を吹く風や豆の花 西島尾南
豆の花新しき風子供に吹き 長谷川双魚
金ほしくなくなる帰路に豆の花
秋元不死男
溝に落ちて泣いて帰る子豆の花 中村汀女
足音も土に消えさり豆の花 :
来し方も日差したしかに豆の花 :
借りてさす日傘は派手や豆の花 :
いち早く蜻蛉よぎりぬ豆の花 :

これよりのことは委せや豆の花 :
 旅人は闊歩するなし豆の花 中村草田男
 乳牛の斑白うつくし豆の花 大野林火
 海上も一寸の春豆の花 百合山羽公
 蔓の白い花おちると豆が幼くついている
 橋本夢道
 豆の花山の一所を平らにし 細見綾子
 豆の花白ばかり胸に不毛の地 下村槐太
 岩山の浅き地表に豆の花 西東三鬼
 おしっこの童女のまつげ豆の花 渡辺白泉
 灯台にもの音もなし豆の花 清崎敏郎
 夕潮や蝶を収めし豆の花 藤田湘子
 父は石切り母は咲かせる豆の花 有馬朗人
 童顔の白泉は亡し豆の花 上田五千石
 ふるさとの岬のように豆の花 坪内稔典
 豆の花ふいに訪ねてお留守なる 辻 桃子
 摘芯の農婦ふくよか豆の花 遠田澄子
 どの道を行くもこんぴら豆の花 佐伯啓子
 包丁の先より小人豆の花 安斎謙太郎
 川曲がる音のかすかに豆の花 森野稔
 褒められて一句のありて豆の花 来島孝子
 また母の話に戻る豆の花 松井美智子
 宇宙旅行はジャックが始め豆の花 泉真琴
 にらむ顔ほほ笑む顔や豆の花 新小田学
 左手で絵手紙描きぬ豆の花 信崎和葉
 白粥の温もりに似て豆の花 森川五城生
 ふる里に仏ふやして豆の花 稲穂静江
 風垣の中に風垣豆の花 伊佐山春愁
 豆の花母はそのまた母に似て 加藤晴美
 立ちながら海女が髪結ふ豆の花 古舘曹人
 退け早き一年生や豆の花 河野静雲
 海風にまともに豆の花おどる 市川丁子
 豆の花どこへも行かぬ母に咲く 加畑吉男

豆にして返す約束豆の花 岩田由美
 いとはとこみんな似ている豆の花
 藤森まり子
 諍いも笑いも家族豆の花 一畑静江
 遠富士や夕影荒き豆の花 阿部九十九
 豆の花咲いて一村むらさきに 田中仁
 よく転ぶ母となりたり豆の花 足利屋篤
 家低く山また低くまめの花 三田きえ子
 まっすぐに海の風くる豆の花 大獄青児
 探す家の番地忘れぬ豆の花 内藤吐天
 往きゆきて見えぬ軀や豆の花 五十崎古郷
 おしゃべりを妻してきしか豆の花
 永田耕一郎
 豆の花一茶旧居に隣り住む 今井千鶴子
 船みちも朝は混み合ふ豆の花 鍵和田柚子
 道問へばここが明日香路豆の花
 五十嵐みち
 午後にまた人の来てをり豆の花 福田雅子
 豆の花咲いて泥鰯のねむるかな 龍岡晋

豌豆の花（晩春） 莢豌豆、豌豆は夏の季節
 マメ科の一年草で、普通は秋に種を蒔く。
 春の訪れとともに勢いよく茎葉を伸ばし始
 め、巻きひげを支柱に絡ませて高さ二メー
 トルほどになる。開花は四～五月、長い花
 茎の先にスイートピーに似た蝶形の花を一
 ～三個つける。花色は白または薄い紫紅色。
 豆類のなかで特に美しい。収穫は五～六月、
 用途によって莢豌豆と剥実用豌豆に分けら
 れ、完熟した実は豌豆と呼ぶ。
 豌豆の花の葉山へ保養かな 格堂
 豌豆やただ一色の麦のはら 白雄
 浅間晴れて豌豆の花真白なり 高浜虚子

まがると風が海ちかい豌豆畑 種田山頭火
妻と満州に留守居の豌豆咲きつづく :
豌豆の咲く土ぬくく小雨止む 飯田蛇笏
豌豆の花のいちにちあからさま :
えんどうも花咲けばまた眺むばし

山口青邨

まだよべの雨たっぷりと花豌豆 中村汀女
鉄線にからみ豌豆花奢る 沢木欣一
豌豆咲く海老茶の色の名を守りて

中村草田男

豌豆の花や自転車稽古の子 森澄雄
花えんどう蝶になるには風足らず 大串章
えんどうの花が風生むここ丹波 坪内稔典
ベランダの鉢に豌豆這はせあり 前田風人
また来るよ豌豆の花咲く頃に

さいとう二水

豌豆の花の二タ畝海女の家 吉岡桂六
すがるもの風を探して花豌豆 豊田邦和
柔らかな息をしてゐる花豌豆 :
豌豆の花より走る小猫かな 中西鋪土
はためきて蝶の羽なり花豌豆 皿井旭川
こぞり咲く花豌豆に風もなし 吉良蘇月
えんどうの花蒲原の海かすみ 大井雅人
暁は花えんどうより見えはじむ

宇田喜代子

七曜やえんどうの花天目指す 岡本和子
妹に花豌豆の揺れやまぬ 田口満代子
逢わざりし日や豌豆の花あかり 加藤青女
妻も素足で白豌豆の畝にあり 藤野武
ただひとりにも波は来る花えんどう

友岡子郷

えんどうの花の飛翔を思いけり

奥山甲子男

蚕豆の花（晩春）

古くは豆といえば蚕豆をさし、したがって豆の花といえば蚕豆の花をさした。いろいろな豆の花のうち蚕豆と豌豆だけは春に開花し、その他の豆類は夏に開花する。蚕豆は春になって縁に紫黒斑の入った白色または薄紫の蝶形の花を開く。

蚕豆の花に追われて更衣 一茶
そら豆の花さく垣の幟かな 迷堂
蝶に雨にうきそら豆も花盛 鶯笠
蠶豆も豌豆も咲くや庭畠 正岡子規
つかれて街からもどるそらまめの花

種田山頭火

これだけ拓いてそらまめの芽 :
街の雑音のそらまめの花 :

蚕豆の花に遊ぶ子単もの 高野素十
そら豆の花の黒き目数知れず 中村草田男
蚕豆が咲く透明の季の耳鳴り 北原志満子
蚕豆の花の吹きぶり母来て居り 石田破郷
蚕豆の朝花臉閉づるもあり 香西照雄
松飾して空豆が咲いている 清崎敏郎
太古の村そら豆の花咲き続く 有馬朗人
啄木が来るそらまめの花あたり 坪内稔典
おんぶの子蚕豆の花ゆびさせる

酒井はまなす

そら豆の花咲く都会へいった子らに
朝富士へ蚕豆の花目をひらき 林徹
そらまめの花のひとつみのさかしげに

八木絵馬

蚕豆の花病名は子に告げず 加畑吉男
そら豆の花海へ向き海の声 川崎展宏
そら豆の花の捨子となりゆけり

高橋たねお
通勤の一行にそら豆の花 宇田喜代子
蚕豆や花がかくせる鬼の顔 島津亮
登校路の蚕豆の花みな笑窪 駒走鷹志
魔がさして蚕豆の花好きになる 山中葛子
そら豆の花に文読む旅人よ 堀之内長一
そら豆の花あるときは地の波頭 伊藤涼子

隠元豆の花（夏）

白または薄紫色で六～八月に開花。多くの豆は秋に完熟させて食用とするが隠元豆は莢を野菜としても利用する。
いんげんの花の上ゆく飛行船 鈴木貞雄
いんげんの花の香こぼし双つ蝶 大橋弘子

小豆の花（夏）

小豆の花は黄色で七～八月に開花。
野良猫が行くよ小豆の花揺らし 青柳志解樹
あはあはと小豆咲きたる旅心 角谷昌子

刀豆（なたまめ）の花（夏）

淡紅色または白色の蝶形の花をつける。
七～八月に開花。
刀豆やのたりと下がる花まじり 太祇
なた豆や垣もゆかりのむらさき野 蕪村
なた豆の花や飛び交ふ島ことば 笹本千賀子